

がん薬物療法副作用管理マニュアル 第2版

吉村知哲, 田村和夫 ● 監修

川上和宜, 松尾宏一, 林 稔展, 大橋養賢, 小笠原信敬 ● 編

〔評者〕 柴田伸弘 (関西医大病院がんセンター診療講師)

がん診療のチームにおいて薬剤師の存在感は非常に大きなものとなっている。有能な薬剤師がいると診療は非常にスムーズになり、より高いレベルでのチーム医療が可能となる。われわれ腫瘍内科医の立場からすると薬剤師は医師と患者の架け橋のような存在であり、がん診療チームの要といっても過言ではない。本書の編集・執筆には現場で活躍する経験豊富な薬剤師、中でもエキスパートであるがん専門薬剤師が多く携わっており、非常に実戦的で読み応えのある内容になっている。

本書の各論は主に症状・徴候から、原因となり得る薬剤と有害事象の頻度や好発時期・特徴、評価のポイント、対策のまとめが続く。各章の最初に「初期対応のポイント」、所々に「ひとことメモ」「Clinical Pitfalls & Pearls」があるのがうれしい。また、CTCAE以外のスケール、なかなか手元にないがん以外のガイドラインに関する記載は現場で役に立つことは間違いない。

また、各章の最後には「症例」の提示がなされており、典型的な副作用の症例もちろんだが、現場でよくある「副作用以外によく起こり得る事象」がピックアップされている。がんの診療で遭遇する事象に対して、抗がん薬以外の

原因について一考するのは重要である。これらは副作用と鑑別すべきポイントである。一方で免疫関連有害事象(irAE)のようにまれであるが非常に重要な症例もあり、これら全てを本書で疑似的に経験できるのは非常にありがたい。読みながら「あるある！」とうなずくような症例が多く提示されているのは、現場感覚が生かされている本書のお勧めポイントなので、参考にしていただきたい。

今回は第2版の出版であるが、初版と比較しても細かなエビデンスやirAE関連のアップデートがなされているので、すでに初版を購入済みの方にもお勧めできる内容となっている。何より臓器横断的な副作用対策について非常にコンパクトにまとめられている点是他書と比較しても秀逸である。ちゃんと有害事象評価をしたい人、困ったときにペラペラとめくって利用したい人にもやさしい構成となっているので、ぜひ手元に置いていただきたい。

本書はがん診療の現場における知識と経験を凝縮した、非常に魅力的な仕上がりになっている。専門領域を問わず、がん薬物療法の習得をめざす医師・薬剤師・看護師、デキる人になりたい全ての職種に自信を持ってお勧めできる一冊である。



B6 変型・368頁

2021年3月

定価: 4,180円

(本体3,800円+税)

[ISBN978-4-260-04478-3]

医学書院 刊